

一一ノ一〇、正月堂十一面尊記

出典 笠置寺所蔵の原本

解説 十一面観音悔過の法要は天平勝宝四年に笠置寺で初めて行われたが、その後いつの日か廃絶した。江戸時代、これを嘆いた東大寺勸進沙門庸訓が笠置寺多聞院光専とはかり、庸訓の先達、公慶上人の志を体し、師の護持せる神符たる正月堂牛玉宝印（ゴオウホウイン）と庸訓の弟子である秀節が造った十一面観音を笠置寺に寄付し、この法要の再興を図ったもの。この十一面観音は現在舍利殿に安置されている。

公慶（一六四八〜一七〇五年）は東大寺勸進僧として当時露座であった大仏の修理並びに大仏殿の再建に生涯を捧げた僧。宝永二年（一七〇五年）四月新大仏殿が上棟、公慶は同七月江戸にて入寂した。

正月堂十一面尊記を記した庸訓は師公慶の意を継いで公盛、公俊とともに大仏殿を完成させ、宝永六年三月から四月に盛大な供養をおこなった。

原文

笠置正月堂者天平
勝宝中夷忠師創焉
師嘗神遊于都史内
院親会聖衆梵音和
雅微妙無上既而知
是十一面觀自在尊
秘密之勝軌就乞聖
衆伝来焉以四年正
月肇築壇修法二七
日夜矣経年已廃又
二月於吾之繙索院
亦修其軌以降于今
不断焉惟夫以之秀
者擅名万方為其状
也松柏參天紫翠拔
地蔽虧嶙峋豊麗
博敞耳驚泉石之碎
泫眼凝灼嵐之縹渺
畫棟高架疑於彩
虹朱甍斜出迷於

喬雲是聖賢之所止
因緣之所在也祇園
之勝槩台嶺之奇觀
亦不為多矣元弘中
車駕出獨于此突為
避難也懸崖斗絕孰
若劍閣之要深潭百
丈不讓天塹之峻轅門
據此按堵自若不意
賊夜潛沂流攀巖
而入急襲於其營
遂至犯 帝座官
軍曳兵而走所以天
步艱難臣妾化離
日月為之慘乎雲霧
為之冥兮當此之時
金地宝坊罹災靡
有子遺嗚呼天哉
多聞院主光專
闍梨嘗嘆曰斯以
開基而來千有餘
載聖者迹熄道風
漸微無復克繼其
業者而不敏志凶
恢復焉余為感而語
曰吾会下僧秀節者
為人真率淨業是
最昔聞優闡王彫
梅檀像之因緣而
自謂濟度澆季之
益莫過焉喜予
彫鏤銘心自足有
時彫刻十一面尊長
四尺許乃告同志
曰將安斯像於各
藍以充覺路之資

糧固是我願也復終
不言先是吾祖公慶
老人經始於廬舍那
殿之次深嘆正月懺
之糜併欲構香刹
以繼実師所修之勝
軌而左方右円不克
悞々厝諸懷云又
慶老有感得十一面
尊神符而秘焉則
亦足以為徵也闍梨
愕然曰吾願亦如此
何其事之脗合也遂
乞得尊像併神符而
敢為己任不少遷動
也未幾有檀越其等
聞而婦依投財若干
忽莊嚴瓔珞相好円
滿於是令余開其淨
眼焉伏以大悲神力
不可思議而其重營
梵閣復修懺法也
可計年而待于以
之秀擅名万方者
亦不虛是為記

元文三年八月六日

造東大寺沙門庸訓謹書

十一面尊像



読み下し文

笠置正月堂は天平勝室中、実忠師これを創るなり。師嘗つて都史内院に神遊して親しく聖衆と会す。梵音（仏の声）和雅にして微妙無上なり。既にして是十一面觀自在尊秘密の勝軌（深遠な義）なるを知り、就いては聖衆に乞いて伝来す。四年正月肇を以て壇を築き修法すること二七の日夜なり（注一）。年を経て已に廢するも、又二月吾が縑索院に於いて亦其軌を修し、以降今に断えず（注二）。

惟に夫れ仏の秀でたるは檀名を万方（すべての方面）になすことなり。その状と為るや松柏参天（松柏が空高く聳える）、紫翠拔地（宝玉が地をはなれて天に昇る）、蔽虧嶙峋（欠けたり覆われたりすること、切り立った山が折り重なって覆い重なること）、豊麗博敞（丸く高いさま）なる。耳は泉石の碎漉（音が激しく鳴り響くさま）に驚ろき、眼は灼嵐の縹渺（遠く遙かに見えるさま）を凝す。畫棟（彩色を施した棟木）の高く架るを彩虹（美しい彩りの虹）と疑い、朱甍（朱い屋根）の斜めに出ずるを喬雲（めでたい雲）と迷う。是、聖賢の止まる所にして因縁の在る所也。祇園（祇園精舎）の勝槩（すぐれた景色）、台嶺（中国浙江省天台山）の奇觀も亦多しと為さず（注三）。

元弘中車駕出するもの独つ。此の実、難を避けんが為なり。懸崖斗絶（切り立ったように険しいさま）劍閣（長安から蜀に入る道にある要害の地）の要といづれおぞ。深潭（深い淵）百丈なれば天塹（ほり）の峻を譲らず（笠置山を取り巻く天険の有様）。轅門（軍門）此に據り按堵し、自若（落ち着いて動じない様）せるに不意に賊、夜沂流を潜り、巖を攀て入り、其の營を急襲し、遂に帝座（天皇の居所）を犯すに至り、官軍、兵を曳きて走る。所以に天（天皇）の歩み艱難（苦しむこと）となり、臣妾（召使いの男や女）叱離（別離する）せるなり。日月之が為に惨たり、雲霧之が為に冥なり。

当に此の時、金地（寺院のこと）宝坊、災に罹り靡て子遺（僅かな生き残り）有るのみ。嗚呼天（運命）なる哉。

多聞院主光專闍梨（高僧の称号）、嘗つて嘆きて曰く。斯の仏開基より而來（このかた）千有餘載、聖者の迹（跡に同じ）熄へ、道風（道徳）漸微（次第にかすかになる）して復克く其の業を継ぐ者なし。而して志図の恢（志の大きいこと）なるを復敏らず。

余（庸訓のこと）為に感じ語りて曰く。吾が会下僧（師僧のところに集まり修行する僧）秀節（ひとしなりしんせつ）為人真卒（ありのままで飾り気がないこと）、浄業（妄念を去って修行すること）す。是に最昔（このうえなき昔）優闍王梅檀像を彫るの因縁（注四）を聞きて、自ら謂うに澆季（末世）に濟度（仏の道によって衆生を救い、極楽の彼岸に渡すこと）するの益に過ぐる莫し、喜びて予め彫鏤（彫刻して飾ること）するを心に銘ずと。自足（自らの状態に満足すること）し、時有りて十一面尊長四尺許の彫刻するを乃ち同志に告げて曰く、將に斯像を各藍（仏寺）に安んじ、以つて覺路

(悟りへの道)の資糧に充つるは、固よりは是れ我が願ひ也と(注五)。

復終わりて言なし。先には是に吾祖公慶老人、経始(土木工事を始めること。ここでは大仏殿の再建)を盧舎那殿に於いての次、深く正月の懺(十一面観音悔過のこと)の廢せるを嘆き、併て香刹(立派な寺院)を構え、以つて実師(実忠)所修の勝軌(十一面観音悔過のこと)を継がんと欲す。而れども、左方右円にして克(な)し。恒々(思い憂うこと)として諸懷(いりませ)厝ると云う。

又、慶老十一面尊神符を感得(感じ悟る)することありて秘とす。則ち亦、以て徴と為すに足る也。

闇梨愕然として曰く、吾願も亦此の如し。何ぞ其事の脗合(物事がぴったりあうこと)するや。遂に乞いて尊像併びに神符を得て敢えて己の任(役割り)と為し、遷り動くこと少なからず也。未だ幾ならずして檀越(施主のこと)有り。其等を聞きて帰依し財若干を投ず。忽ち莊嚴瓔珞、相好円満なり。是に於いて余其の淨眼(清浄な法眼)を開かしむ。

伏して以て大悲の神力は不可思議にして、其重ねて梵閣(仏堂)を営み、懺法を渡修するや年を計へて待つべくのみ。仏の檀名を方方に秀(秀でたものにする)するは亦虚しからず。是に記を為す

元文三年(一七三八年)八月六日

造東大寺沙門庸訓謹書

注一、以上笠置寺縁起に詳しい

注二、この修法は東大寺二月堂のお水取りとして絶えることなく現在に至っている

注三、以上貞慶経営の般若台の様子か。

注四、于闐、今の新疆ウイグル自治区の一带。仏陀が切利天に昇つて生母摩耶夫人のために説法していた時、優闐王が地上で仏陀の姿を拝することができない悲しみから病臥するに至ったため、群臣がその病を癒すため梅檀で五尺の仏陀を造つたことをいう。増一阿含經卷二十八。

注五、文化十年頃作成の笠置寺説明書き「笠置寺古跡由緒記」に

正月堂観世音有之御立六尺御足ノ裏ニ

右志趣者金輪聖王玉躰安穩当寺大旦那

御武運長久并施主各二世安樂

元禄四辛未年十二月五日 願主文殊院卜信敬白

ほり附御座候文化十四年迄百二十三年也

外ニ御長四尺観世音有之

是ハ南都東大寺勸進所公慶上人

彫刻し当院へ被納玉ふ様則正月堂縁起ニ

相見へ申候文酉迄七十五年也

とある。この像は現在舍利殿に安置されている。